



日本東アジア実学研究会 第六回読書会

テン・ヴェニアミン

京都大学大学院人間・環境学研究所
研修員

自己紹介

- テン・ヴェニアミン
- ロシア、サハリン出身
- 京都大学大学院人間・環境学研究科 研修院
- 専攻：近現代ロシア思想（グリゴリー・ポメラントフ）、東西比較思想（鈴木大拙）

八巻和彦『クザーヌス 生きている中世 —開かれた世界と閉じた世界』(2017)

- 第二章 東アジアにおける〈知恵〉概念の伝統とクザーヌスの〈知恵〉概念
 - 〈知恵〉と〈道〉、〈無学者〉と〈愚人〉—
 - 1 覚知的無知
 - 2 〈知恵〉と〈学〉
 - 3 〈無学者〉のモチーフ
 - 4 外界から内へ —〈知恵〉への憧憬
- おわりに 永遠にして無限なる知恵が万物に輝き出する
- ⇒ ニコラス・クザーヌスと老子との比較

1 覚知的無知

- 老子(紀元前四-5世紀)
- 『老子』(または『道德経』)七一章

知って知らざるは上なり、知らずして知るは病なり。夫れ唯だ病を病とす、是をもって病あらず。聖人は病あらず、その病を病とするをもって、是をもって病あらず。(本文、277)

⇒ニコラス・クザーヌス(1401-1464)の「**覚知的無知**」〈docta ignorantia〉との共通性

2 〈知恵〉と〈学〉

- クザーヌスの〈覚知的無知〉と老子の〈道〉

道の道とすべきは常の道にあらず、名の名とすべきは常の名にあらず、名無し、天地の始めには、名有り、万物の母には。故に常に無欲にしてもってその妙を觀、常に有欲にしてもってその徼を觀る。この両者は、同じく出でて名を異にし、同じくこれを玄という。玄のまた玄、衆妙の門。(『老子』一章、p.279)

〈知恵〉と〈学〉 2

- ・ 老子の〈道〉は概念的に認識されなえないもので、**超越的**と同時に**内在的**でもある。
- ・ クザーヌスの二つの〈知恵〉
『無学者考—知恵について』
 - 1 〈永遠な知恵〉=キリスト教の**神**(**超越的**)
 - 2 〈知恵〉=神的な知恵が反映したもの、「この世界」(**内在的**)

〈知恵〉と〈学〉 3

- クザーヌスの〈知恵〉の二重構造：伝統的及び経験的次元
- 〈道〉は二重構造を有しない。〈道〉の内在性はなんらか不可知なものである⇒「玄德」=玄い(くろい)
- 〈道〉と〈学〉の関係(『老子』四八章)
学を為せば日に益し、道を為せば日に損す。これを損しまた損して、もって無為に至る。無為にして為さざる無し。
(p.282)
- 儒学者に対する批判⇒老子は無知と知の論理的区別が不可能であると主張する。

〈知恵〉と〈学〉 4

- ヨハンネス・ヴェンク(伝統的なスコラ学)vsニコラス・クザーヌス:〈覚知的無知〉に対する批判vs擁護
- 儒家の〈学〉に対して老子は「前識は、道の華にして愚の始めなり」(p. 283)と批判する。
- 弁論家に対するクザーヌスが謳える〈無学者〉idiotia
批判の共通性(『無学者考—知恵について』)

〈知恵〉と〈学〉 5

- 学問がなぜ力を有するだろうか
- クザーヌス：人が言語と理性ratioを根拠にしているから。
- 老子の「名」

名と身はいずれか親しき、身と貨といずれかまされる、得と亡といずれかうれいある。この故に甚だ愛すれば必ず大いに費え、多く蔵すれば厚くうしなう。足るを知れば辱められず、止まるを知ればあやうからず。以て長久なるべし。(p.285)

〈知恵〉と〈学〉 6

- 「名声」という問題：老子は〈学問〉の地平を超え、〈知恵〉＝〈道〉の地平から当時の社会と儒家を批判する。
- ヴェンクvsクザーヌス：〈学問〉の地平において〈知恵〉を考えるvs〈知恵〉の地平において〈知恵〉を考える。

3 〈無学者〉のモチーフ

- クザーヌスの〈無学者〉*idiotia*のモチーフと老子との共通性

衆人は皆もちうる有りて、我れは独り頑にして鄙に似る。我独り人に異なりて食母を貴ぶ。(『老子』、p.288)

- 「食母」は〈道〉であり、「愚人の心」を持っている「我」が独り〈道〉を味わっている。

〈無学者〉のモチーフ 2

- 〈無学者〉の五つの特徴：
 - 1 〈知恵〉を**直接**に獲得できるあるいは〈知恵〉が直接に彼に到来する。
 - 2 日々の生活ですでに**幸福**なるものとして賞賛される。
 - 3 書物の知識に**無縁**である。
 - 4 〈無学者〉が「**聖なる〈無学者〉**」に転化する。
 - 5 **信仰**を有する。

〈無学者〉のモチーフ 3

- クザーヌスの〈知恵〉は「**感覚的世界から自らを引き離し、また無限なる神の形相へと向き直ることのうちに存在するのであり、またそれは清められていて愛で燃え上がる精神のうちにのみ受け入れられる**」
(p.289)
- 老子の「**天下の貴となる**」(五十六章)⇒〈**愚人**〉=〈**聖人**〉
- ただし、老子は**信仰**について何も言っていない。

4 外界から内へー〈知恵〉への憧憬

- 四節からクザーヌスと老子の相違の分析が中心となる。
- 老子の「**愚人**」の**孤独性**
- クザーヌスの〈**無学者**〉は社会の中でよろこんで働いている⇒**孤独性の克服**
- 「**兄弟**」と呼び合い、**三角形**になるように座る。

外界から内へー〈知恵〉への憧憬 2

- 相違の理由はどこから来るのか。
- 老子は〈道〉は「自己の内にこそ見出しうる。〈道〉とは主体的・体験的直感として到達されるうる」
(p.292)
- クザーヌスの『神学綱要』の知性の「予備的味わい
praegustatio」

外界から内へー〈知恵〉への憧憬 3

把握されえない者(神)は、存在が把握されえない仕方でのみ見られうること、把握されうるいかなる方法によっても把握されえない者である彼は、現に存在する万物の存在の形相であること、さらにこの形相は、現に存在する万物のなかに把握されえないものとして止まりつつ、知性的なもろもろの〈しるし〉のなかで〈光が闇のなかで光る〉ように光っているが、知性的〈しるし〉によっては決して把握されえないことを。(p.293)

外界から内へー〈知恵〉への憧憬 4

- クザーヌスは「**味わうsapere**」ことで**神を希求する駆動力**を得る。
- クザーヌスは「**外界の果たす役割を認めている**」
(p.293)
- 老子は「**内的な自己経験にだけしか価値を認めない**」(同上)

外界から内へー〈知恵〉への憧憬 5

- クザーヌスは「外界から内界へと通じる〈知恵〉探求の一筋の〈道〉が存在する」⇒外界と内界への注目とその両界の間の調和を求める。
- 老子はそのルートは存在しない。さらに、外界との関係を断絶すべきと要求する。
- 「驚異」: クザーヌスは強く感じるが、老子の場合、存在しない。

外界から内へー〈知恵〉への憧憬 6

- 再び、〈学問〉と〈知恵〉の関係性について
- クザーヌスの〈無学者〉が〈知恵〉の探求において導きの役割を果たしうることになり、同時に、〈学問〉も**補助手段**としての役割も果たせる。⇒〈学問〉は〈知恵〉を**分有**しているにすぎない。
- 老子の〈道〉の**超越性**が格段と強調されるが、外界からの〈道〉へと至るルートが**見出されえない**。

外界から内へー〈知恵〉への憧憬 7

「〈道〉が外界を通してわれわれに語りかけるという可能性は必要ないことになる・・・此の世界の価値はむしろ否定されねばならない」(p.296)

・クザーヌスにおける〈学問〉が〈知恵〉にたいして相補的な関係を立つ。

・クザーヌスと知恵の「白い光」: さまざまな色の光がお互いに混合される。

老子の道の「玄」(黒い): 「すべての色を包含した黒である」

人格性と非人格性

- クザーヌスと老子の多くの共通点が存在することが明らかである。ただし、2人の差異とはどこから来るのだろうか。
- 私の考えでは、やはり人格性／非人格性という問題にかかるとは思いませんか。

つまり、クザーヌスは否定神学のベースに自らの思想を展開したのですが、「覚知的知恵」はやはりイエス・キリストの人格性を含んでいると思います。しかし、老子の〈道〉は人格性を有しないので、一つの根本的なちがいの思いませんか。

老子の共同体との関わり方をどう考えるか。

- 逃避主義(escapism)の側面を評価する必要があるのではないか。
- 「隠遁者」のコミュニティと社会との多様な関わり方の可能性とは。

沈黙の多様性と〈知恵〉とどのような関係性を持つのか。

- 実践という沈黙について

- ご清聴どうもありがとうございました。